

雜錄

JES	日本標準規格	第54号
	銅地金分析方法	類別 K1
		頁 1

第一章 総則

第一条 本規格は日本標準規格第53号銅地金ノ成分検定ニ之ヲ適用ス

第二条 銅地金分析方法ハ次ノ通り之ヲ區分ス

一、電気分銅及電気型銅分析方法

二、上型銅分析方法

三、並型銅分析方法

第三条 秤量及試料ノ取扱ハ次ノ各号ニ依ル

一、秤量ニシテ検定ヲ受ケタル天秤及分銅ヲ用キ 0.1mg 追正確ニ秤量スルコトヲ要ス 但シ不純物定量ノ試料ニ對シテハ 0.1g 追正確ニ秤量スルモノトス

二、試料ハ之ヲ磁製皿ニ入レ塩化「カルシウム」ヲレタル「デシケーター」中ニ 24 時間以上放置シタル後秤量スルモノトス

三、試料ニシテ鉄分カ機械的ニ混入シ米ル處アルフ以テ純分及鉄分ノ定量ニ供スル試料ノ秤量ニ際シ豫め強力ナル磁石ヲ以テ鉄分ヲ除去スルコトヲ要ス

第二章 電気分銅及電気型銅分析方法

第四条 純分量法ハ次ノ通りトス

試料 5g フ電解用「ビーカー」(備考1)ニ入レ時計皿ニテ覆ヒ硝酸(比重 1.42) 70% 硝酸(比重 1.84) 10g 及水 250ml ノ混液ヲ徐々ニ加ヘ溶解セシメタル後煮沸シテ亞硝酸ヲ追出シ水ニテ約 1500ml ト稀釈ス

次ニ田筒狀白金陰極(備考2)ト螺旋狀白金陽極ヲ用キ 2 箇ノ半田筒時計皿ニテ覆ヒ室内ノ溫度 15°C 乃至 30°C 于テ陰極ノ内外總面積 1dm² = 付 0.5 乃至 1「アムペア」ノ電流密度ヲ電解ス

液カ銅「イオン」ノ色ヲ失ヒタルトキ時計皿ノ下面並「ビーカー」ノ内壁及電極ノ柄ノ液面ニ露出セル部分ヲ水洗シ洗浄水ニ依リテ電解液面ヲ約 0.5cm 上ラシメ更ニ約 30 分間電解ヲ続ケ陰極ノ柄ノ新タニ液中ニ浸セタル部分ニ最早銅ノ附着ヲ認メサルニ至リテ電解液約 1cc フ取出、硫化水素水又ハ黃色血漿塩溶液ヲ以テ終点ヲ檢ス(備考3)電解完了後電流ヲ通シツク「サイフォン」ヲ電解液ト水トヲ置換シ電極ヨリ気泡ノ生セサルニ至リ陰極ヲ取外シ之ヲ「アルコホル」(備考4)ニテ洗ヒタル後五酸化磷ヲ入レタル常壓「デシケーター」中ニテ 30 分間以上乾燥ノ上秤量ニ純分量ヲ定ム

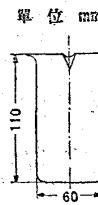
本分析試験ハ 2 回之行ヒ其ノ成績ニ差 ± 0.15% ヲ超ユルトキハ更ニ之ヲ繰り返スコトヲ要ス

大正十五年六月二十三日決定 工業品規格統一調査會

JES	日本標準規格	第54号
	銅地金分析方法	類別 K1
		頁 2

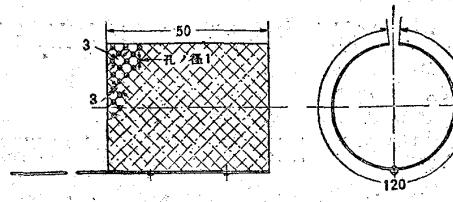
備考

1. 電解用「ビーカー」ハ下図ノモノヲ標準トス



単位 mm

2. 田筒狀白金陰極ハ下図ノモノヲ標準トス



単位 mm

3. 電解時間ハ 15°C 于テ電流約「アムペア」ヲ用キ約 15 時間ヲ普通トス

4. 「アルコホル」ハ往々遊離酸ヲ含有スルコトアルヲ以テ使用前其ノ有無ヲ検査スルコトヲ要ス 若之ヲ含有スル場合ニハ固体ノ苛性堿達ヒテ之ヲ中和シ蒸溜ノ上使用スルモノトス

第五条 不純物定量法ハ次ノ通りトス

一、砒素ノ定量

試料 100g フ容量 2「リットル」ノ「ビーカー」ニ入レ時計皿ニテ覆ヒ硝酸(比重 1.42)

大正十五年六月二十三日決定 工業品規格統一調査會

JES	日本標準規格	第54号
	銅地金分析方法	類別 K1
		頁 3

4000g フ徐々ニ加ヘ之ヲ溶解セシメタル後煮沸シテ亞硝酸ヲ追ヒ出シ水ニテ「リットル」ニ稀釈ス

硫酸第二鉄「アムモニア」3g フ加ヘ搅拌溶解セシメタル後液ヲ搅拌シツク「アムモニア」水(比重 0.9) フ徐々ニ加ヘ一旦沈殿セル水酸化銅カ蔵ニ溶解シ總ラムトスル程度ニ達セシメ約 20 分間煮沸ス

1 時間温所ニ放置シタル後濾過シ「アムモニア」水(1:50) ニテ 2 回洗滌シ濁液ヲ硝酸(比重 1.42) ニテ酸性ト為シ再ヒ硫酸第二鉄「アムモニア」2g フ加ヘ「アムモニア」水(比重 0.9) ニテ前ト同様に処理ス

瓶クシテ 2 回ニ得タル沈殿ヲ合シテ之ヲ温湯酸(1:3) ニ成ルヘク少量ニ溶解セシメ「アムモニア」水(比重 0.9) フ加ヘ再沈殿ヲ行ヒ濾過シ「アムモニア」水(1:50) ニテ 2 回洗滌ス

斯クシテ得タル砒素及「アンチモン」ヲ包溶セル水酸化銅ノ沈殿ヲ温湯酸(1:3) ニ成ルヘク少量ニ溶解セシメ砒素蒸溜装置(備考1)ノ「フラスコ」(c)ニ入レ催化第一鉄 5g フ温酸(比重 1.18) 6000g フ加ヘタル後「フラスコ」ヲ備考1ノ如ク連結シ「ヒンチコック」ニテ閉チタルゴム管ニテ枝管(d)ヲ閉ス

冷却装置(d)及(f)ニ冷油ヲ通シ「フラスコ」ヲ油浴内ニ成ルヘク深ク浸シ其ノ露出面及頭部ニ適當ノ材料ニテ覆ヒ保溫ス。油浴ノ溫度ヲ 125°C 保持ス。テ蒸溜シ適時油浴ヲ降下セシメ「フラスコ」内ノ液量ヲ檢シ残液量ヲ約 2500ml トナリタルトキ漏斗(a)ヨリ塩酸(比重 1.18) 4000g フ滴下シテ蒸溜ヲ航行シ残液量ヲ約 2500ml トナリタルトキ再ヒ塩酸(比重 1.18) 4000g フ滴下シテ蒸溜ヲ統行シ残液量ヲ約 2500ml トナリタルトキ蒸溜ヲ終了ス。

「フラスコ」内ノ残液ハ之ヲママ保留シ「アンチモン」定量ノ試料ニ供ス

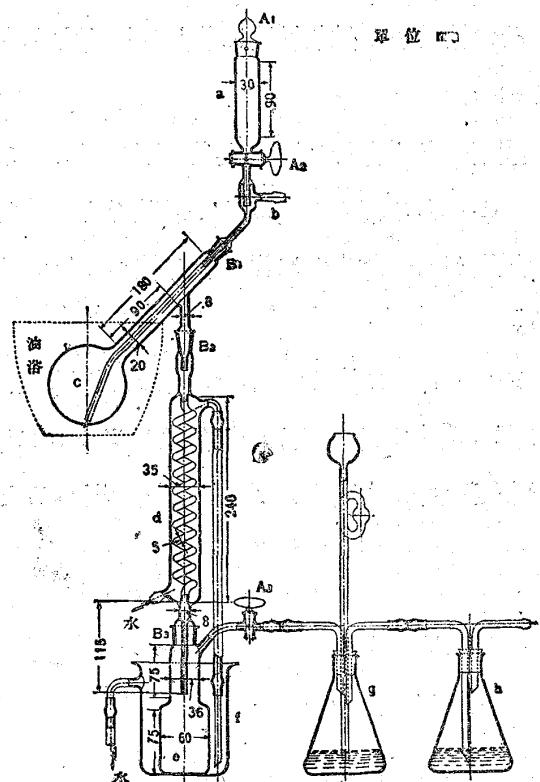
B2 ノ速結ヲ離シ蛇管(d)ノ内壁ヲ水ニテ洗滌シ洗液ヲ受器(e)内ノ液ニ合シ之ヲ容量 1「リットル」ノ「エールレンジイヤー」フラスコニ移シ冷却シツク「エノールフタレイン」ヲ指示薬トシ苛性堿達溶液(40%) ニテ中和シ之ニ硫酸(1:3) 数滴ヲ加ヘ酸性ト為シタル後重炭酸「ナトリウム」10g フ徐々ニ加ヘ振盪シ溶解ヒシメ温化「カリウム」液溶(10%) 約 0.5cc フ加ヘ更ニ指示薬トシテ溴粉溶液(備考2) 10cc フ加ヘ備考3ニ依リタルト度溶液ヲ滴定シ次式ニ依リ砒素含有量ヲ算出ス

使用セル度溶液 100 = 相當スル砒素量(g) × 度溶液使用量(cc) × 100 = 砒素% 試料 (g)

本分析試験ハ空実験ヲ行ヒ其ノ結果ニ依リ砒素含有量ヲ修正スルコトヲ要ス

JES	日本標準規格	第54号
	銅地金分析方法	類別 K1
		頁 4

備考 1. 砒素蒸溜装置ハ下図ノモノヲ標準トス



大正十五年六月二十三日決定 工業品規格統一調査會

大正十五年六月二十三日決定 工業品規格統一調査會

JES 日本標準規格		第54号
銅地金分析方法		類別 K1 頁 5
(a) 漏斗ハ「コック」兼用ノ蓋 A ₁ 及「コック」A ₂ 有シ下端ニハ管 (b) フリクションシタル硝子管ヲ有シ B ₁ ノ部分ニ於テ「フ拉斯コ」(c) ト摺合セニ依リテ気密ニ連結セラル		
(b) 支管		
(c) 「フ拉斯コ」(容量 3000) ハ頭ノ中部 = 45 度ノ角度ニテ枝管ヲ有シ B ₂ ノ部分ニ於テ冷却器 (d) ト摺合セニ依リテ気密ニ連結セラル		
(d) 冷却器ハ内部ニ管筒ヲ有シ B ₃ ノ部分ニ於テ摺合セニ依リテ受器 (e) ニ連結セラル		
(e) 受器ハ「コック」A ₃ ハ有スル枝管ニ依リテ安全装置 (g) ニ連結セラル		
(f) 冷却槽ハ容量 8000 ノ「ビーカー」ニシテ其ノ上部ニ排水管ヲ附シタルモノ		
(g) 安全装置ハ容量 3000 ノ「エルレンマイヤー フ拉斯コ」ヲ安全漏斗及 2 本ノ硝子管ヲ附シタルゴム栓ニテ気密ト為シタルモノニシテ苛性曹達溶液 (20%) 約 1000g フラスコ内に注入シテ放冷シタルモノトス		
2. 濃硫酸溶液ハ濃度約 10% フラスコ内ニテ細末ト為シ之ヲ少量ノ冷水ニテ練り約 1 「リットル」ノ熱湯中ニ搅拌シツツ注入シタル後約 1 分間煮沸シテ放冷シタルモノトス		
濃硫酸溶液ハ使用ノ都度ニ調製スルモノニシテ濃度ノ為光褐色ヲ呈スルモノハ之ヲ使用スグコトア得ス		
3. 濃度溶液ノ調製及比素相當量ノ決定法		
(1) 濃度溶液ノ調製		
氯化「カリウム」約 10g ト沃度 2.5g ト「ビーカー」ニ入れ水 2000g ト加ヘ搅拌シテ完全ニ溶解シタル後水 1000g ト加ヘ精製石綿ニテ過濾シテ容量 1 「リットル」ノ「メス フ拉斯コ」中ニ入れ水ニテ「リットル」ニ稀釈ス此ノ沃度溶液ハ約 1/50 の濃度ヲ有ス		
(2) 比素相當量ノ決定法		
昇華銀溶液ハ無水亞硫酸 (0.9895) ブ「ビーカー」ニスレ温苛性曹達溶液 (20%) 1000g = 溶解シタル後冷却後直ニ容量 1 「リットル」ノ「メス フ拉斯コ」ニ移シ「エーノールフレイン」ヲ指示薬トシ硫酸 (1:10) ト加ヘ微酸性ト為シニテ苛性「ナトリウム」溶液 (5%) 2000g ト加ヘタル後之ヲ水ニテ「リットル」ニ稀釈ス此ノ亞硫酸溶液ハ正確ニ N/50 の濃度ヲ有シ其ノ 100g = 0.0007496g / 比素		
大正十五年六月二十三日決定	工業品規格統一調査會	

JES 日本標準規格		第54号
銅地金分析方法		類別 K1 頁 6
含有スル元素ニテ之ヲ測定ス		
上記ノ亞硫酸溶液 2500g 容量 5000g 「エルレンマイヤー フ拉斯コ」ニスレ水ニテ 1500g = 稀釈シ重炭酸「ナトリウム」5g ト加ヘ溶解シタル後沃化「カリウム」溶液 (10%) 0.5g ト加ヘ濃硫酸溶液 100g ト指示薬トシテ上記ノ沃度溶液ニテ滴定シ次式= 依リ沃度溶液 100g = 相當スル比素ノ量ヲ定ム		
$0.0007496 \times 25 = \text{沃度溶液 } 100 = \text{相當スル比素量 g}$		
沃度溶液使用量 (g)		
本決定法ニハ空滴定行ヒ其ノ結果ニ依リ比素相当量ヲ修正スルコトヲ要ス		
二、「アンチモン」ノ定量		
比素相当量試験ニテ「フ拉斯コ」(c) 内ニ残留シタル液ヲ試料トシテ同一裝置ヲ用キ冷却器 (d) = 冷水ヲ通シ漏斗 (a) ョリ磷酸 (比重 1.7) 700g ト硫酸 (比重 1.84) 600g ト滴下ス		
次ニ油浴ノ溫度ヲ上昇セシメ約 190°C = 保チ漏斗 (a) ョリ磷酸 (比重 1.7) 1/2 分毎 60g 滴下シツツ蒸溜ノ磷酸 (比重 1.8) 1000g ト滴下シタルトキ直ニ枝管 (b) フラスコ内ニテ氯化水素瓦斯發生装置 (備考) = 連結シタル水素瓦斯「フ拉斯コ」ニ送入スルコト約 1 時間ニシテ蒸溜ヲ終了ス		
E. ノ連結シタル水素瓦斯 (d) ノ内壁ヲ水ニテ洗滌シ洗液ヲ受器 (e) 内ノ液ニ合シ之ヲ容量 5000g 「ビーカー」ニ移シ之ニ塩酸「カリウム」0.5g ト加ヘ蒸發シ過剰ノ磷酸ヲ追ヒ出シ液量約 1000g = 逐シム次ニ之ニ酒石酸 1g ト加ヘ溶解セシメタル後「アムニア」水 (比重 0.9) フ以テ液ヲ略中シテ之ニテ硫酸 5g ト加ヘ水ニテ 1000g = 稀釈シ約 90°C = 保チ之ニテ硫酸水素瓦斯約 20 分間通シタル後熱湯 1000g ト加ヘ稀釈ス更ニ之ニ約 10 分間硫酸水素瓦斯ヲ通シ加熱ヲ止メ液ノ冷却スル迄硫酸水素瓦斯ヲ通ス		
斯クシテ生シタル沈殿ヲ過剰シ硫酸水素ニ含メル硫酸溶液 (4%) フテ洗滌シ更ニ硫酸水素ニ含メル磷酸 (1:50) フテ完全ニ洗滌ス		
此ノ沈殿ヲ黃色硫酸「アムモニウム」溶液 (備考) 2 ノ成ルヘク少量ニ溶解セシメ磁鐵坩埚ニ入れ徐々ニ蒸發乾涸シタル後磷酸 (比重 1.42) 数滴ヲ加ヘ蒸氣ヲ混ホシ加熱乾涸ス更ニ之ヲ約 750°C = 灼熱シテ恒量ニ達セシメ四二酸化「アンチモン」(Sb ₂ O ₃) トシテ秤量シ次式ニ依リ「アンチモン」ノ含有量ヲ算出ス		
$79.19 \times Sb_2O_3 (g) = \text{アンチモン \%}$		
試料 (g)		
備考		
1. 氯化水素瓦斯發生装置ハ容量 1 「リットル」ノ「フ拉斯コ」ニテ氯化「ナトリウム」50g ト磷酸 (比重 1.8) 2000g トアレ水 500g 分液漏斗、安全漏斗及「コック」附		
大正十五年六月二十三日決定	工業品規格統一調査會	

JES 日本標準規格		第54号
銅地金分析方法		類別 K1 頁 7
硝子管ヲ附シタルゴム栓ニテ気密ト為シタルモノニシテ使用中ハ分液漏斗ヨリ硫酸 (比重 1.84) フ毎 120 滴ノ割合ニテ滴下スルモノトス		
2. 黄色硫酸「アムモニウム」溶液ノ調製		
「アムモニア」水 (比重 0.9) 500g = 沈降硫黄 5g ト加ヘ硫酸水素瓦斯約 2 時間通シテ得タル溶液ヲ水ニテ約 3000g = 稀釈シ過濾ス		
三、蒼鉛ノ定量		
試料 100g ノ容量 2 「リットル」ノ「ビーカー」ニスレ時計盤ニテ覆ヒ硝酸 (比重 1.42) 400g ト徐々ニ加ヘ之ヲ溶解セシメ水 1000g ト加ヘテ煮沸ス		
塩酸 (比重 1.18) 100g ト加ヘタル後水ニテ 7000g = 稀釈シ液ヲ搅拌シタル之ニ「アムモニア」水 (比重 0.9) ハ少量ツツ徐々ニ加ヘ少量ノ水酸化銅ノ沈殿カ存留スルニ至リ一夜温所ニ放置シタル後過濾シタル後水ニテ 2 回洗滌ス		
此ノ沈殿ヲ紙ト共ニ「ビーカー」ニ移シ硝酸 (1:5) 2000g ト加ヘ數回洗滌シタル後過濾シタル後過濾シ硫酸 (1:20) ハ少數回洗滌シクシタル後過濾シ硫酸 (比重 1.84) 500g ト加ヘ之ヲ熱シ硫酸ノ白煙ヲ発生スルニ至リ之ヲ冷却シタル後水 3000g = 稀釈シ冷却後過濾シ硫酸 (1:20) ハ少數回洗滌ス		
此ノ過濾ヲ「メチルオレンジ」ヲ指示薬トシ苛性曹達溶液 (10%) ハ中和シ炭酸「ナトリウム」溶液 (5%) 1000g ト青化「カリウム」溶液 (1%) 1000g ト加ヘ約 60°C = 加熱スルコト約 30 分間ノ後生成シタル炭酸蒼鉛ノ沈殿ヲ過濾シ炭酸「アムモニウム」溶液 (5%) ハ少數回洗滌ス		
此ノ沈殿ニ温硝酸 (1:5) 2000g ト注キ之ヲ溶解シ温硝酸 (1:20) ハ少數回洗滌シ其ノ過濾ヲ湯煎上ニテ蒸癡乾涸シ炭酸 (比重 1.18) 0.5g ト水 1000g ト加ヘ加熱シ清澄液ト为シ更ニ水ニテ 1500g = 稀釈シ約 2 時間放置後定量用濾紙ニテ過濾シ温水ニテ 3 回洗滌ス		
此ノ沈殿ニ温硝酸 (1:2) ハ注キ之ヲ溶解洗滌シ其ノ過濾ヲ磁鐵坩埚ニ入れ蒸癡乾涸シ更ニ暗赤色=灼熱シ恒量ト為シ硫酸蒼鉛 (BaSO ₄) トシテ秤量シ次式ニ依リ蒼鉛ノ含有量ヲ算出ス		
$89.70 \times BaSO_4 (g) = \text{蒼鉛 \%}$		
試料 (g)		
四、鉛ノ定量		
試料 500g ノ容量 1 「リットル」ノ「ビーカー」ニスレ時計盤ニテ覆ヒ硝酸 (比重 1.42)		
大正十五年六月二十三日決定	工業品規格統一調査會	

JES 日本標準規格		第54号
銅地金分析方法		類別 K1 頁 8
2000g ノ徐々ニ加ヘテ之ヲ溶解セシメ電熱器ニテ軽ク煮沸シ完全ニ亞硫酸ヲ追出シタル後水ニテ 7000g = 稀釈ス 白金陰極 (備考) 1 ト白金陽極 (備考) 2 ハ用キ陰極ヲ迴轉シタル後水ニテ 10 分間電流 0.5 「アムペア」ヲ通シタル後約 6 「アムペア」ニ高メ約 30 分間後陽極ヲ取換ヘタル後尚電解ヲ続ケ約 10 分毎ニ陽極ヲ取換ヘ陽極ニ附着物ナキニ至リタルトキ終点トス		
「ビーカー」内ノ液滴ハ之ノママ保留シ硫黃定量ノ試料=供ス		
陽極取換ヘノ際ニハ電流ヲ通シタル後洗滌瓶ヨリ徐々ニ水ヲ注キ水洗シツツ引上クルコトヲ要ス		
陽極ノ附着物ナ数滴ノ過酸化水素水ヲ加ヘタル硝酸 (比重 1.42) ハ溶解セシメ之ヲ湯煎上ニテ蒸癡乾涸ス之ニ硝酸 (比重 1.42) 2500g ト加ヘ溶解セシタル後水ニテ 1500g = 稀釈シ螺旋状白金陰極 (備考) 3 ト白金陰極 (備考) 2 ハ用キ 0.1 「アムペア」ニテ電解スルコト約 2 時 30 分間ノ後前ト同様ニ陽極ヲ取換ヘ之ニ附着物ナキニ至ラシム (備考) 4		
附着物ノ着キタル陽極ヲ水ヲ以テ次ニ「アルコホル」ニテ洗滌シ約 200°C = 於テ約 15 分間乾燥シタル後之ヲ「デシケーター」内ニテ放冷ノ上秤量ノ附着物ノ量ヲ求ム附着物ヲ過酸化鉄ト看做シ次式ニ依リ鉛ノ含有量ヲ算出ス		
$86.6 \times \text{過酸化鉄} (g) = \text{鉛 \%}$		
試料 (g)		
備考		
1. 白金陰極ハ下図ノモノノ標準トス		
單位 mm		
2. 四筒狀白金陽極ハ純分定量用四筒狀白金陰極 (純分定量法備考2) ハ使用ス		
3. 螺旋狀白金陰極ハ下図ノモノノ標準トス		
單位 mm		
大正十五年六月二十三日決定	工業品規格統一調査會	

JES	日本標準規格	第54号
銅地金分析方法	類別 K 1	
	頁 9	

4. 陽極附着物ノ色ニ依リ蓋鉛ヲ含有スル度アリト認ムル場合ニハ再電解ニ付スルモノトス

五、硫黃ノ定量

鉛ノ光量ヲ終リタル残液ヲ試料シ筒苟白金陰極(純分定量法備考2)ト螺旋白金陽極ト用キ搅拌シツツ之ヲ電解シ完全ニ銅ア陰極ニ附着セシメタル後電極ヲ取去リ炭酸「ナトリウム」0.5gヲ加ヘ溶液ヲ蒸発濃縮ス。此ノ場合濃縮シタル溶液中ニ銅ノ残留セルフ認メタルトキハ小容積ニテ電解ヲ行ヒ之ヲ完全ニ除去スルコトヲ要ス。

溶液カ殆ド蒸発乾涸シタルトキ炭酸(比重1.18)10ccヲ加ヘ時計皿ニテ覆ヒ注意シツツ蒸発乾涸シ再ヒ炭酸(比重1.18)10ccヲ加ヘ蒸発乾涸シ硝酸塩ナキニ至ラシム之ヲ炭酸(比重1.18)10ccト水100ccトニテ溶解セシム「アムモニア」水(1:10)ニテ中和シニ炭酸(1:1)1ccヲ加ヘ酸性ト為シ水ニテ約200ccニ稀釈ス。之ヲ約70°Cニ加熱シ搅拌シツツ徐ニ温過化「パリウム」溶液(20%)10ccヲ加ヘ硫酸「パリウム」ヲ沈澱シメ一夜放置ス。此ノ沈澱ヲ「スウェーデン」紙(00番11cm)又ハ之ト等品2枚ニテ過濾シ塩酸(1:400)ニテ5回洗滌後温水ニテ洗滌シ溶液ヲ堿素「イオン」ヲ認メタルニ至ラシム之ヲ空氣槽内ニテ乾燥ス。

沈澱ヲ出来得ル限り漏紙ヨリ分離シ漏紙ハ之ヲ燒キテ堆積中ニテ完全ニ灰化シ之ニ沈澱ヲ加ヘ灼熱シ恒量ニ至ラシム硫酸「パリウム」(BaSO₄)トシテ秤量シ次式ニ依リ硫黄ノ含有量ヲ算出ス。

$$\frac{13.74 \times BaSO_4}{\text{試料}(g)} = \text{硫黄 \%}$$

本分析試験ニ於ケル加熱ハ總テ電熱ヒ依ルモノトス。

六、鉄ノ定量

試料5gヲ容量500ccノ「ビーカー」ニ入レ時計皿ニテ覆ヒ硝酸(比重1.42)70cc、硫酸(比重1.84)10cc及水250ccノ混液ヲ徐々ニ加ヘ溶解セシム煮沸後凹筒狀白金陰極(螺旋白金陽極ト用キ陽極ヲ轉換シツツ約60°Cニテ於テ電解シ銅分ヲ除去ス)

溶液ヲ蒸発濃縮シタル後之ヲ瓶製皿ニ移シ更ニ蒸発シ最後ニ強熱シ遊離ノ硫酸ト大部分ノ酸性硫酸「アムモニアム」トヲ追ヒ冷却後之ニ炭酸(比重1.18)10滴ト水100ccヲ加ヘ溶解シ「ビーカー」ニ移シ硫酸化水素瓦斯ヲ飽和セシム過過シ饱和硫酸化水素水ニテ洗滌シ溶液ヲ蒸発シ30ccニ濃縮ス。

之ニ饱和臭素水5ccヲ加ヘ煮沸シ臭素ヲ全部追ヒ出シタル後塩化「アムモニアム」1gヲ加ヘ更ニ「アムモニア」水(比重0.9)ヲ稍過量ニ加ヘテ水酸化鉄ヲ沈澱セシム之ヲ約10分間煮沸後過過シ温「アムモニア」水(1:50)ニテ洗滌ス。

JES	日本標準規格	第54号
銅地金分析方法	類別 K 1	
	頁 10	

此ノ沈殿ヲ塩酸(1:2)ニ溶解シ「アムモニア」水(比重0.9)ヲ稍過量ニ加ヘ再ヒ水酸化鉄ヲ沈澱セシム之ヲ約10分間煮沸後過過シ溶液ニ堿素「イオン」ヲ認メタル迄温「アムモニア」水(1:50)ニテ洗滌ス。

漏紙上ノ水酸化鉄ヲ温硫酸(1:10)約50ccト温水約100ccトニテ完全ニ溶解洗滌シ其ノ溶液ヲ沿却ス。

還元装置(備考3)ノ瓶(б)及ゴム管(с)ヲ連結シ之ニ水ヲ充タシメニ分液漏斗(а)ニ少量ノ水ヲ入れ「コック」(f)ヲ開キタルマゴム管(с)ヲ分液漏斗(а)ノ下端ノ管子管ヒ捕入シゴム管(б)ヲ限シ硝子管中ノ空気ヲ完全ニ水ト置換セシム「ビンチコック」(d)及「コック」(f)ヲ閉セ(е)ヨリ亞鉛「アマルガム」(備考1)約200gト前ニ得タル鉄溶液ヲ注入ス。

次ニ過「マンガン」酸「カリウム」炭酸鈉溶液ト硫酸(比重1.84)トニテ洗滌シタル炭酸瓦斯ヲ「コック」(g)ヨリ送入シ分液漏斗(а)内ノ空気ヲ全部追ヒ出シ直ニ(е)及「コック」(g)ヲ閉テ数分間激シ振盪シ數分間放置シタル後「コック」(f)ヲ少シ開キ亞鉛「アマルガム」ノ細粒ヲ落丁下シ水ト置換セシム時陸「ビンチコック」(d)ヲ開キ「アマルガム」ヲ瓶(б)ニ移ス。

斯クシテ最後ノ「アマルガム」カ「コック」(f)ヲ流下シタルトキゴム管(с)ヲ指ニテ壓シ「アマルガム」上ソ溶液ヲ悉ク「コック」(f)ノ上ニ至ラシム「コック」(f)ヲ閉テ溶液ト「アマルガム」トヲ完全ニ分離ス。分液漏斗(а)内ノ溶液ハ「コック」(f)ヲ通シ漏斗ヲ以テ容量500ccノ「エルレンマイヤー フラスコ」中ニ速ニ温過シ分液漏斗(а)内壁及漏斗ヲ硫酸(1:10)ニテ洗滌ス。

此ノ溶液ヲ(備考2)ニ依リ定メタル過「マンガン」酸「カリウム」溶液ニテ滴定シ次式ニ依リ鉄ノ含有量ヲ算出ス。

$$\frac{\text{使用セル過「マンガン」酸「カリウム」(g)}}{\text{漏斗10cc×相當セル容積}} \times \frac{\text{過「マンガン」酸「カリウム」(cc)}}{\text{漏斗使用量}} \times 100 = \text{鉄 \%}$$

備考
1. 亞鉛「アマルガム」ノ製法

容量200ccノ「エルレンマイヤー フラスコ」ニ精製シタル水銀450gト純粹ナル亞鉛約10gヲ入レ硫酸(1:10)ノ少量ニテ覆ヒ湯煎上ニテ加熱シ時々振盪シ固体亞鉛メ消失シタル後冷却ヒ保存ス。

2. 過「マンガン」酸「カリウム」溶液ノ鉄相当量決定法
純硫酸「ナトリウム」0.1gヲ容量400ccノ「ビーカー」ニ入レ約80°C乃至90°Cニテ熱シタル水約200ccヲ加ヘ溶解セシム之ニ硫酸(1:1)10ccヲ加ヘ温水70°C以上ニ保チツツ約N/50ニ調製セバ過「マンガン」酸「カリウム」溶液ニテ徐々

大正十五年六月二十三日決定	工業品規格統一調査會
---------------	------------

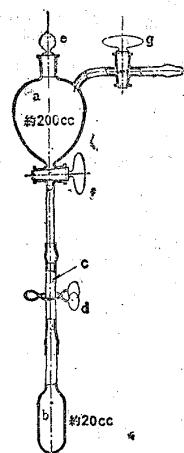
JES	日本標準規格	第54号
銅地金分析方法	類別 K 1	
	頁 11	

二、滴定シ微赤色ヲ帶ヒタルトキ終点トス

堿酸「ナトリウム」0.1gハN/50過「マンガン」酸「カリウム」溶液74-63ccニ相當シ其ノ100gハ0.001117gニ鉄ニ相當スルヲ以テ次式ニ依リ使用過「マンガン」酸「カリウム」溶液1ccニ相當スル鉄ノ量ヲ定ム。

$$\frac{0.001117 \times 74-63}{100} = \frac{\text{使用セル過「マンガン」酸「カリウム」溶液1cc}}{\text{漏斗10cc×相當セル容積}} \times g$$

3. 還元装置ハ下図ノモソノ標準トス。



第三章 上型銅分析方法

第六条 純分定量法ハ次ノ通りトス

試料5gヲ容量500ccノ「ビーカー」ニ入レ時計皿ニテ覆ヒ硝酸(比重1.42)70cc、硫酸(比重1.84)10cc及水250ccノ混液ヲ徐々ニ加ヘ之ヲ溶解セシタル後加熱シ硝酸ヲ

JES	日本標準規格	第54号
銅地金分析方法	類別 K 1	
	頁 12	

完全ニ追ヒ出シ水約700ccニテ稀釈ス。

硫酸第二鉄「アムモニアム」溶液(1cc=鉄0.01gヲ含ム)10ccヲ加ヘ一旦沈澱セル水酸化鉄カ全ク溶解シ終ル迄搅拌シツツ「アムモニア」水(比重0.9)ヲ加ヘ約10分間煮沸後過過シ温「アムモニア」水(1:50)ニテ3回洗滌シタル後過液及洗液ハ之ヲ保留シ沈殿ハ之ヲ少量ニ温硫酸(1:10)ニテ溶解シ水ニテ約50ccニ稀釈シ「アムモニア」水(比重0.9)ヲ過量ニ加ヘ水酸化第二鉄ヲ沈澱セシム約10分間煮沸後過過シ温「アムモニア」水(1:50)ニテ3回洗滌ス沈殿ハ之ヲ保留シ温液及洗液ハ前ニ保留シタル温液及洗液ニ加ヘ蒸発シ約230ccト為シ之ニ硫酸(比重1.84)10ccト硝酸(比重1.42)2ccヲ加ヘ第四系統分定量法ノ場合ト同様ノ操作ニ依リ電解シ銅量ヲ定量ス。

前ニ保留シタル沈殿ヲ温硫酸(1:10)=溶解シ銅ヲ含マサル金属「アルミニウム」棒ノ一片ヲ入レ約30分間煮沸シ銅ノ金属鉄トシテ析出セシム之ヲ液ト分離シ水洗後温液「アムモニア」水(1:50)ニテ少量ニ溶解シ水30ccヲ加ヘ「アムモニア」水(比重0.9)ヲ過量ニ加ヘテ加熱ス。

此ノ場合沈殿アラハ温過シ之ヲ温「アムモニア」水(1:50)ニテ3回洗滌ス。溶液ハ之ヲ「アムモニア」臭氣發セタル迄蒸発シ水酸化第二鉄ヲ加ヘテ微酸性ト為シ冷却後黄色血紅蛋白溶液(4%)10滴ニ硝酸「アムモニアム」溶液(10%)5ccヲ入レタル「ネッスラー」管ニ入レ比色ニ適当ナル分量迄水ヲ加ヘ振盪ス。別ノ「ネッスラー」管ニ黄色血紅蛋白溶液(4%)10滴ニ硝酸「アムモニアム」溶液(10%)5ccヲ入レ水ヲ加ヘテ試料液ト略同容積ト為シ之ニ「ピュレット」ニ依リ標準銅溶液(備考)ヲ少量ツツ加ヘ振盪シ両者ノ着色濃度ヲ同一ナラシメ注加シタル標準銅溶液ノ量ト両管ノ液量トヨリ銅量ヲ求メ之ヲ電解ニ依リ得タル銅量ニ加算銅ノ純分量ヲ定ム。

備考
標準銅溶液ノ調製
精製硫酸銅(CuSO₄·5H₂O)0.393gヲ水ニ溶解シテ「リットル」ト為ス。本液ノ1ccハ0.0001gニ銅ヲ含有ス。

第七条 不純物定量法ハ第五条不純物定量法ニ同シ

第四章 並型銅分析方法

第八条 純分定量法ハ第六条純分定量法ヲ準用ス

試料カ銅電解ヲ不良ナラシムル過量ニ硝酸「セニウム」等ヲ含有スル場合ニハ適宜ノ処理ニ依リ之ヲ除去シタル後電解スルモノトス。

大正十五年六月二十三日決定	工業品規格統一調査會
---------------	------------

主要製鐵所に於ける鐵鋼材生産高調 (単位噸) 商工省鐵山局

種別	9月分			1月以降累計		
	昭和3年	昭和2年	比較増減	昭和3年	昭和2年	比較増減
銑 鐵	125,450	99,004	26,446 27%	1,117,069	924,458	192,611 21%
普 通 鋼	141,981	131,536	10,445 8%	1,355,292	1,206,381	148,911 12%
普通銅壓延鋼材	126,471	113,818	12,653 11%	1,203,410	993,638	209,772 21%
内 譯						
販賣向銅片	3,234	5,914	△2,680 △45%	29,441	51,641	△22,200 △43%
販賣向シートバー	955	—	955	5,744	540	5,204 9,64%
鋼板 { 厚0.7mm以下	8,064	6,552	1,512 23%	77,175	63,260	13,915 22%
其 他	22,372	18,011	4,361 24%	231,382	176,312	55,070 31%
棒 鋼	46,016	37,739	8,277 22%	403,644	327,720	75,924 23%
形 鋼	19,581	17,907	1,674 9%	182,594	150,742	31,852 21%
軌 條	14,212	15,876	△1,664 △10%	156,552	122,517	33,035 27%
ワイヤロッド	1,386	2,296	△910 △40%	20,040	18,537	1,503 8%
鋼 管	5,434	3,981	1,453 36%	49,455	36,221	13,234 36%
其 他	5,217	5,542	△325 △6%	47,383	45,148	2,235 5%

△印△減

昭和3年9月中外國銑輸入高 (昭和3年11月12日銑鐵共同組合)

輸出港	横濱	神戸	大阪	門司	其他	計	1月以降累計
印度	7,341	5,553	17,337	2,760	515	33,506	221,937
英國	533	205	—	—	—	733	7,614
獨逸	—	—	—	—	—	—	3,208
佛國	—	—	—	—	—	—	179
白耳	—	—	—	—	—	—	867
米國	—	611	—	—	—	611	5,097
和蘭	—	—	—	—	—	—	101
瑞典	—	—	—	—	—	—	1,134
計	7,874	6,369	17,337	2,760	515	34,855	240,137

備考 大藏省主税局調査の数字は単位擔なるを以て1擔0.06948噸の割合にて換算したり。
尙獨逸より3擔(0.18144噸)の輸入ありたるも端数につき除外す。

銑鐵市場在庫月報 昭和3年9月30日現在 三菱商事株引會社金屬部

市場	東京	横濱	名古屋	大阪	神戸	門司	長崎	室蘭	釜石	兼六浦	大連	其他	合計	前月比較	前年同月
持主別	越	越	越	越	越	越	越	越	越	越	越	越	越	越	越
生産筋	2,994	3,948	1,037	4,732	4,812	21,028	2,427	17,478	23,165	222	81,665	-5,341	96,111		
問屋筋	1,115	2,970	17,200	50	1,160					2,050	24,545	+1,013	27,518		
消費筋	9,363	1,770	17,600	16,740	3,468	380				475	49,796	+6,373	60,877		
合計	17,420	5,777	56,322	9,320	21,028	2,427	17,478	25,690	222	156,006	+2,045	184,506			
前月比較	-2,504	-1,291	+6,236	-1,566	+4,461	-1,349	+202	-2,516	+222	+50					

銑鐵市場在庫品種別月報 昭和3年9月30日現在 三菱商事株式會社金屬部

品種	京濱	名古屋	阪神	九州	滿鮮	北海道	其他	合計	前月比較
兼二浦	4,250	1,200	7,904	3,649	17,678		100	34,781	-5,396
釜石	530		800			2,427	3,757	-3,136	
輪西	4,495	1,370	3,700	500	576	21,028	200	31,869	+3,378
鞍山	1,065	930	8,270	1,580	23,721			35,566	+3,504
本溪湖	502	977	8,868	693	988		244	12,272	-4,831
淺野銑	4,428							4,428	+1,307
漢陽鐵									
東八幡銑									
仙人									
大暮									
楊子銑			100					100	0
龍烟									
Tata	450		8,200	100				8,750	+2,290
Burn	230	500	8,230	2,100	75			11,185	- 995
Bengal	1,250	600	4,850	100				6,800	+3,480
Cleveland	100			190				290	+ 165
Summerlee									
Hematite	120		620	30				770	+ 100
Swedish			100	38				138	+ 38
Luxemburg				75				75	- 9
米國銑			3,400					3,400	+3,050
マイソール				250				250	0
雜	200	1,230	* 15	130				1,575	- 900
合計	17,420	5,777	56,322	9,820	43,168	21,028	2,971	156,006	+2,045
前月比較	-2,504	-1,291	+6,236	-1,566	-2,314	+4,461	- 977	-2,045	